

〈女性はこんなに大変なのか!〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

日常、当たり前のように使っているが、もしこれがなかったら、女性ほどそんなに苦労することか。日本で「アンネ」ナプキンが誕生したのは一九六一年。インドでは国産のナプキン「パリー（妖精）」が登場したのは、ほんの十年前の前のことらしい。これは、同国で女性の生理用品の開発・普及に人生を捧げた男性の奮闘物語。実話に基づく映画というが、にぎやかな音楽を挟みながら、女性問題の原点から家族と社会、自立支援システムまで、現代インドの女性の姿を生き生きと描く。

二〇〇一年、北インドの田舎町の小さな工房の共同経営者であるラクシュミ（クマール）は結婚式を挙げたばかり。新妻ガヤトリ（アープテー）と二人乗りするために自転車の後ろに座りやすい椅子を取り付けるなど、器用なアイデアアマンだ。幸せいっぱいのある日、ラクシュミは妻についての、衝撃の事

実を知る。生理になった女性は「穢れ期間」として部屋に入らず、廊下で寝起きする習わしは承知していたが、ガヤトリは生理の処理に不潔な古布を使っていたのだ。病気になったらどうする？と妻が心配でならないラクシュミ。市販の外国製のナプキンは高価で妻は拒否する。ともあれ妻を守らねば、と夫は綿と布とで手づくりナプキンを作るが、漏れが生じたりしてうまくいかない。ナプキン研究に没頭し、試行錯誤を繰り返すラクシュミの行動は、狭い街中で波紋を広げてゆく。ガヤトリも愛する夫の熱意がうれいどころか世間に対して恥づかしいと、泣きながら訴え、ついに実家に連れ戻されてしまう。インドの大家族制度の中の人間関係や月経観、世間体など内側からリアルに描かれていて、興味深い。

セルロース・ファイバーを使ってナプキンを作る簡易製作機を考案する。外国製の何百分の一の値段の機械で清潔なナプキンが作れる！そこへ思いがけない強力な援軍登場。デリーから来た女子大生パリー（カプール）だ。

彼女はMBAのコースで学び、一流企業へ就職目前のエリート。そのチャンスを蹴ってラクシュミの夢の実現のために手を貸すという。それは、この簡易製作機で作った国産ナプキンを農村の女性たちが販売員として売る仕事を生み出し、やがては彼女ら自身が機械を買い取り、製造販売の起業ができるようにすること。ラクシュミの「妻への愛」から始まった発明は、こうして農村女性の経済的自立のための草の根活動へと広がっていった。

こうした活動に注目した国連の招きで二人はNYへ。世界のひのき舞台上で、貧困、因習、差別、無知など山積する問題と闘いながら来た道を、カタコト英語でユーモラスに語るラクシュミ。これぞ男性の女性への愛の言葉と胸に響く（しかも、実にわかりやすい!）。

いま、日本の生理用品の品質は世界最高水準だという。インドとは異なる「アンネ」その後の歩みは、田中ひかる著『生理用品の社会史』に詳しい。

『パッドマン〜5億人の女性を救った男』

インド映画 (137分)

監督：R. パールキ

出演：アクシャイ・クマール、ラーディカー・アープテー、ソナム・カプール

12月7日より TOHO シネマズシャンテほか、全国順次ロードショー

